＜キリスト教思想史――古代から中世・宗教改革＞

０．オリエンテーション――宗教と文化
１．キリスト教の成立と初期キリスト教
２．キリスト教教父――使徒教父、弁証家
３．キリスト教の国教化

（休講：10/29，11/5）

４．三位一体論の形成過程とその意義　11/12
５．研究発表１：齋藤、田中　11/19
６．研究発表２：立川　11/26
７．キリスト教教父３――アウグスティヌス　12/3
８．中世キリスト教世界のダイナミズム　12/10
９．キリストと文化――スコラ的文化総合　12/17
10. 研究発表３（「キリスト教学研究室」にて）：張　12/24
11. 自然神学と歴史神学　1/7
12. イスラームと１２世紀ルネサンス　1/14
13. 宗教改革と近代世界（「キリスト教学研究室にて」）　1/21

＜前回＞キリスト教教父１――使徒教父、弁証家

（１） 教父とは誰か

Ａ．小高毅『古代キリスト教思想家の世界――教父学序説』創文社、1984年。

「ダマスコのヨアンネス（七九九年没）まで続き、彼をもって東方教会最後の教父とされるのである。では、西方教会に目を転じてみよう。ヒッポの司教アウグスティヌスは、四一二年以降、ペラギウスの異端に対処し、数々の著作をなしている。」（14）

Ｂ．ティリッヒ『キリスト教思想史Ｉ』（著作集・別巻二）白水社、1980年。

（２） 使徒から使徒教父へ

１．「使徒時代に直ちに続く時代を「使徒直後時代」と呼んでいるが、その時代におけるキリスト教思想の本流と思われるべきものは「使徒教父」の思想である」、「ただし「使徒教父」という呼称は十七世紀に初めて用いられたもので、使徒たちと直接の交渉を持った教父たちの意味である」、「内容的には、一世紀末から二世紀前半における異邦キリスト教の所産としての一群の文書を指している。新約聖書中の諸書と使徒教父の諸書との間には時代的に相重なる部分もあるが、概して言うなら使徒教父は新約につづく時代に属している」（有賀、98）

２．使徒教父の歴史的背景：ユダヤ教との関係、ローマ帝国との関係
　　第一次（66-70）と第二次(132-135)のユダヤ戦争
　課題：殉教精神、異端との対決、初期カトリシズムへ（信仰告白の成立、教職制の確立）

３．先行・隣接の宗教（とくにユダヤ教）から、イエスの出来事を解釈するのに必要となる象徴概念を受容・改変

メシア、人の子、ダビデの子、神の子、キュリオス、ロゴス
↓
テオロギア・クリスティ：「神についてと同じようにキリストについて」
　イエスにおける神性の経験
↓
唯一神論との関係づけの課題（三位一体論、キリスト論）
　後に体系的な解決を必要とすることになる。

４．主要な教説

・「無からの創造」、全能の神
「ヘルマスの牧者」の「第一にまぼろし」：「天に座し、無から有を創り、それを聖

なる教会のために、ふえ広がらせたもうた神があなたのことを怒っておられます。」

・「神の救済の経綸（オイコノミア）」、キリストの先在、霊キリスト論

・聖餐論（アンティオキアのイグナティオス, Ignatios, 35 頃-110 以降）

５．殉教者イグナティオス（佐藤吉昭『キリスト教における殉教研究』創文社）

６．終末の遅延→制度的倫理的な規定の整備（新律法主義）　cf. パウロ書簡と牧会書簡

「ディダケー」：生命の道と死の道とにかかわる倫理的教訓、教会的諸行事に関する規則（バプテスマ、断食、祈祷、聖餐）、使徒・預言者について、同信旅行者への待遇について、日曜礼拝について、職制（エピスコポイ、ディアコノイ）について、終末論的警告。

（３） 使徒教父の役割

迫害下の状況における正統教会への道。

７．初期キリスト教から初期カトリシズムへの歴史的展開（制度化・正統教会形成）のプロセスにおいて、キリスト教を担ったキリスト教指導者。正統キリスト教から逆に歴史を遡及するときに、確認できる教会指導者たち。

ヘレニズムのユダヤ教やグノーシスなどが競合する思想状況で、後の正統キリスト教へと展開する方向性を示している。

（４） キリスト教弁証の意義

９．「告発は二つあった。第一は、キリスト教は帝国の構造の基盤を危くすることによってローマにとって脅威であるという政治的告発である。第二は、キリスト教は哲学的断片をまぜ合わせた一つの迷信であるという哲学的告発であった。」（ティリッヒ、65）

11. タティアノス(Tatianus)：ユスティヌスの弟子。「ディアテッサロン」(Diatessaron)のいう「調和福音書」の著者。シリア教会で５世紀まで使用。

（５） ユスティノス(Justinus Martyr, --165)

14. ロゴス・キリスト論

「神は超越的な「名称すべからざる」究極者」、「究極者から」「ロゴスが生まれた」、「この「生まれたるもの」として第二神ロゴスが万有創造に際して父なる神のために動作者となり、またアブラハム、ヤコブ、モーセ等に現われて神の意志を伝達したのである」、「そのロゴスが人になって現われた者がイエス・キリストである。そのロゴスの働きはイスラエルの範囲に限られていない」、「人間にはすべて「ロゴスの種」または「種子的ロゴス」が宿っている」、「キリストはロゴスそのものとして、哲学者たちに優っているが、両者は全く別の真理を示しているのではなく、ただ真理啓示の完全・不完全の差異があるのみである。」(136)

↓

15. キリスト教のギリシャ化(ハルナック)？　あるいはギリシャのキリスト教化？

学問的神学としてのキリスト教思想、しかし、キリスト教的視点から選択が行われた。

16. 宗教多元性におけるキリスト教（古くて新しい問題)、包括主義？

17. アレクサンドリアのフィロンに遡る思想系譜（ヘレニズム・ユダヤ教）

３． キリスト教の国教化

Ａ． キリスト教迫害と正統教会への道

（1）ローマ帝国の迫害のキリスト教

犯罪者として処刑されたイエスとその運動の後継者としての初期キリスト教会。

対決は不可避的であったが、それは何をもたらしたのか。

１．迫害下のキリスト教（１～３世紀）：この間にキリスト教の原型が完成した。

２．ユダヤ教から継承したもの：

1)終末思想：善悪の最終的決着の時・罪の問題の最終的解決＝歴史（創造から終末）の完成　→　神との完全な関係の実現・本来的な人間性、正義の実現

2)黙示的終末論：宇宙的ヴィジョン→　罪と悪に対する勝利、ハルマゲドン

バビロン捕囚以降の状況・ゾロアスター教の影響
・ヘレニズム的な文化環境への適応、民族宗教の再建
・黙示文学：ダニエル書、エズラ書、ヨハネ黙示録（アポカリプシス）

３．迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号
獣 666、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」
終末・時の切迫の実感 → 迫害下の教会への励まし（最後まで耐え忍ぶ者は幸いである、命の書）

４．黙示文学の影響：千年王国論（終末時のキリストの千年支配、黙示録 20:2-6 ）

５．ローマの平和か、神の平和か（二者択一）
ローマの平和（Pax Romana）：政治と経済による上からの支配、そのもとでの秩序＝平和。
・皇帝崇拝：平和は皇帝の恩恵である。神的な皇帝。
・ローマの軍隊による地中海世界の統合＝古い諸国家の滅亡
交通網と法の整備
・経済：貨幣の統一、商品作物の海洋交易による富の集中。
↓
民族的伝統・文化の解体と環境破壊

６．ヨハネ黙示録：バビロンと新しいエルサレムの対立。
「新しい天と新しい地」「もはや海もなくなった」（黙示録 21:1）

７．キリスト教はこの対立の中で、ローマの秩序を利用することによって拡大し、ローマとの妥協に至った。

（２）迫害から公認・国教化へ

８．迫害（規模も期間も様々、棄教者の問題）
66：ローマの大火、皇帝ネロによるキリスト教迫害。 第１次ユダヤ戦争(66-70)
95 頃：ドミティアヌス帝時代のキリスト教迫害。 第２次ユダヤ戦争(132-135)
249：デキウス帝の迫害
303：ディオクレティアヌス帝(284-305、四分割統治制)の迫害

９．キリスト教の公認と国教化：このとき歴史は動いた！
313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）
325：ニケア公会議 361：背教者ユリアヌス帝即位。
381：コンスタンティノポリス公会議
392：国教(テオドシウス帝)

10. 公認・国教化 → 帝国の秩序維持のために、キリスト教の統一が必要になる。

Ｂ．キリスト教の公認と国教化の意味

（１）公認・国教化の意義

１．キリスト教の公認と国教化

２．政治的秩序と宗教的秩序の相補性
天上の秩序と地上の秩序、天の統一と地の統一（上と下との照応性、照応の論理）
↓
政治神学 cf. 近代的な政教分離

３．政治的要請としての「正統―異端」論争
宗教的要因との関連性の問題
多様性を保持しつつ、異端との対応で徐々に正統教会へ
・近代日本におけるキリスト教合同問題
・ポスト・プロテスタント時代のキリスト教
ティリッヒ

４．三位一体論の意義
・国教会＝正統教会の基盤となる教理→その後のキリスト教世界の基礎
・独裁的絶対的な神理解への批判契機（モルトマン）、多様性の保持

（２）国教化の帰結

５．国家神学・政治神学としてのキリスト教神学
「神学」：キリスト教の発明ではない。古代ギリシャ起源。
ストア哲学の神学区分（アウグスティヌス）：
民衆の神学（神話）／国家の神学（ポリスの国家儀礼）／自然の神学（哲学）
↓
キリスト教による「神学」の変革
キリスト論の意義（芦名定道『自然神学再考』晃洋書房）
６．「国家の神学」を組み込むことによって、キリスト教神学の成立過程は完了した。
７．絶対平和主義（軍隊の宗教性）から正戦論（アウグスティヌス）へ、そして聖戦論へ。
キリスト教の国教化は、国家に対する教会の関わりについて再考を迫ることになる。
パウロの国家論の意義（宮田光雄）
８．アウグスティヌスの「神の国」論
「四世紀終わりから五世紀初めにかけて、キリスト教は、忍耐から確立へと変遷した。伝統的なローマの祭礼は国の支持を失い、皇帝たちは、キリスト教の神をローマの運命の保証人として頼りにしたのだった。ミラーノの司祭、アンブロシウスはローマ皇帝にユダヤの王という聖書のイメージを適用することによってこれに答えた。ヒッポのアウグスティヌスは、キリスト教徒の支配者による戦争の遂行を正当化した地の国と神の国の相互補完の理論を展開した。」（マーカス、162 頁）
↓
このアウグスティヌスの意図とその後の影響史・解釈史との区別、そして関連。
９．現代的問題：キリスト教と公共性
国教会体制後の政治的状況で、なおも、正戦論にとどまるのか。
国民国家・民族主義を超えた普遍性の実現を試みるのか。
↓
下からの公共性、ネットワークとしての公共性

＜参考文献＞

１．田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房。
２．H・チャドウィク 『初期キリスト教とギリシア思想』日本基督教団出版局。
３．マルー 『キリスト教史２・教父時代』講談社、平凡社ライブラリー。
４．ペリカン 『イエス像の二千年』講談社学術文庫。
５．Ｊ．ヘルジランド、Ｒ．Ｊ．デイリー、Ｊ．Ｐ．バーンズ
『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館。
６．アウグスティヌス 『神の国』岩波文庫。
７．R.A.マーカス 『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館。
８．宮田光雄 『平和の思想史的研究』創文社。
『平和のハトとリヴァイアサン――聖書的象徴と現代政治－』岩波書店。
『非武装国民抵抗の思想』岩波新書。
『国家と宗教――ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店。
９．シュミット 『政治神学』未来社。
10. Ｊ．モルトマン、Ｊ．Ｂ．メッツ 『政治的宗教と政治的神学』新教出版社。
11. アガンベン『ホモ・サケル――主権権力と剥き出しの生』以文社。
『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社。